



特定非営利活動法人 **アイユーゴー通信 第 19 号**

〒590-0432 大阪府泉南郡熊取町小垣内 1-10-18

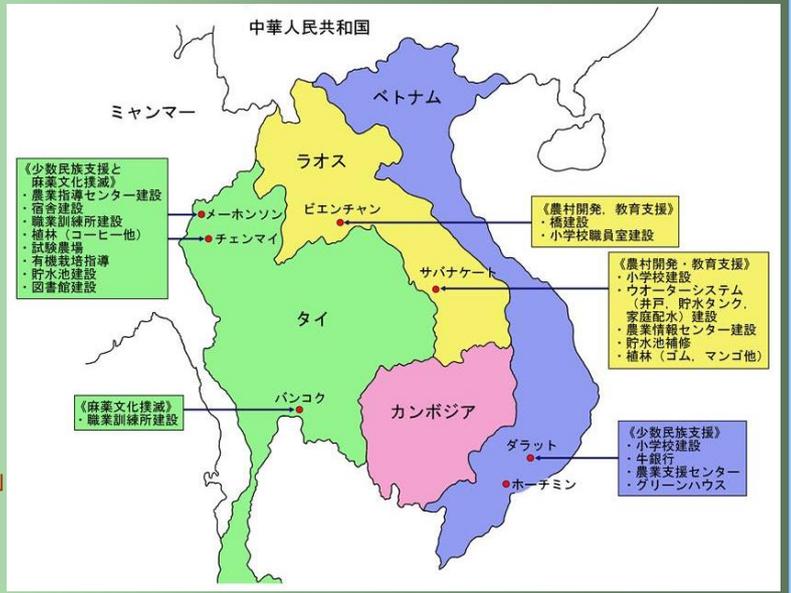
TEL : 072-452-8340 FAX:072-452-5680

e-mail : snittaskmj0715@yahoo.co.jp

homepage : <http://aiyugo.fc2web.com>

目 次

- (1) みんなの手で国際協力を
マダガスカル共和国アナラマンガ地方の人とともに
理事長 新田 幸夫
- (2) 実現できた平成 24 年度の事業
- (3) ツアーに参加して 正会員 川田 明美
- (別紙) 国際協力活動に必要な英語力をつける
2013 年 3 月 ベトナムスタディーツアー報告
近畿大学総合社会学部 2 年生 7 名
近畿大学総合社会学部教授・理事 新田 香織
- (右 : アイユーゴーの活動地域 2001 年から 2012 まで)
- その他 : 1) マダガスカル共和国(2009-10) 「アナラマンガ地方におけるパイナップルとシナモンの植栽による農村開発」
2) ベトナム・ラオス・タイ・日本の 4 か国医療保健・福祉の合同セミナー(2007-10)



みんなの手で国際協力を！

—マダガスカル共和国アナラマンガ地方の人とともに— 新田 幸夫



海外での支援活動は難しい。どこまで支援すればいいのか。自分の子どもの教育の仕方に共通しているのかもしれない。子どもたちは、helpless (ヘルプレス)「自分ではどうすることもできない」状況にいる。

途上国はインフラが整っていない。電気がない、安全な飲み水がない、下水道もない、食べ物が不足している、仕事がない。私たち日本人は生まれたときから家には電気がつく、蛇口から水が出る、トイレがある、学校があり、商店街がある。どこに行っても不自由しない。社会制度や科学技術が整っている。その分だけ、いろんな分野において、私たちは経験を重ねている。途上国の仲間たちが最も真摯に求めるものは、その経験にある。



(シンプルだ。電線がない。水道もない)

この人たちに支援活動をするとき、自分の子どもへの教育を思い起こす。だから今からお話することは、ある意味で、私の教育観かもしれない。

たとえば、小学低学年だった娘がいるとする。彼女は牛や馬やヤギなどの動物を見て、それらをひとまとめにして「牛」と言っているとしよう。その娘は仲間たちのなかで、実に楽しそうに話している。その姿を見て、娘が家畜すべてを牛という「誤り」は、別段、気にならない。気にしたところで、彼女がいつも大胆で力強く生きているさまは、頼もしい。むしろ、この程度の「誤り」を正すことは、彼女の生き方のなかで「細かな事」にかかわりすぎるように感じる。もし「細かな事」にこだわって、「牛は牛、馬は馬、ヤギはヤギだよ」と教え、そのあとで、本当に理解したかをさらに確認

したとすれば、娘は自分の大胆で力強い生き方を疑い、さらに将来そのような生き方をすることを避けるようになるかもしれない。だから、あえて、「小さな誤り」を常に、厳格に正す必要はないと考える。皆さんならど



うしますか。

確かに、あまりにお転婆で、交通事故や事件などに巻き込まれるような事態があるとなれば、強く押しとどめるのは当然のことだ。ましてや、公共施設などでの我ままし放題で、モラルに欠ける行動は論外だ。適切な時に適切な対応をしなければならない。実際のところ、多くの子どもは間違いと気づけば、すぐに自分自身で正すことができるようになるのだ。子どもの「自立と自律」を信頼したいと思う。

しかし、同じように子どもを持つ聡明な親の中には、違う対応をする者もいるだろう。私たち大人が「誤り」をすべて正してやらないと、子どもはどのように学ぶことができるのか、「誤り」を正すことは大人の責任ではないか、大人の義務ではないか、と疑問を投げかけるだろう。こちらがその人に何度こちらの意見を説明しようとしても、その人は決して自説を曲げないだろう。たしかに、わからないこともない。

親は子どものために自分がいなくてはならないと考える。おおむね、他人のために働いている人は、自分がいなければ相手の人は生きていけないと信じるようになる。自分は相手にとってなくてはならない存在であるということを、あたかも自分の人生設計の中に確立させているようでもある。だから、相手が自立できるようになったと他人から言われても、相手は頼りなく不安でしようがないと考え続ける。「もうこのあたりで自立させましょう」と進言、提言すれば、他人のために働いている人は、自分の存在そのものに反撃を食らったと錯覚してしまうかもしれない。結局、他人のために働く善良な人を狼狽させてしまう結果となるのではないか。

だが、他人に対する思い込みは真実ではないことが多い。他人は自分ではないからだ。「人の為」に思っても、「偽」となることもありうるのではないだろうか。だからこそ、相手の気持ちを傷つけるかもしれない危険を冒してでも、私は、疑問を投げかけなければならないこともあると思う。

人はそれぞれ、それぞれ「個人」なのだ。英語では、「個人」を individual と言う。in=not (否定), divid = divide (分割), ual = able (可能) と考えることができる。つまり、「これ以上分割できない」のが個人だ。だから、子どもも親も、どこまでも個人なのだ。個人として存在している。かけがえのない一人として。その存



在そのものに人間としての尊厳がある。相互不可侵の存在だからこそ、相互の信頼と尊重が必要となる。それをもって、徐々に理解を深めることができればよいと私は考える。

さて、海外での支援活動についても同様のことが言える。そこに住む人に尊厳ある生活を支援するには、互いを信頼し尊重することが重要である。そのためには、彼らを取り巻く環境を築き上げる協力も必要となる。

まず、どのような環境が必要なのかは彼らとの議論で決める。そのあとは彼ら住民一人一人の責任の下で活動が行われるべきである。彼らが自分たちで決めた以上私たちは、助言等を求めてこない限り任せることにしている。ただし、「思い切ってしよう」、「失敗を恐れないでいこう」と励まし続ける。このような過程を経て、彼らは自分たちの活動に対して独自の価値観を持ち始めるのだ。

先日、マダガスカル現地を訪ね、住民たちと話し合ったとき、現在絶滅危惧種を中心にした植樹をしているが、オレンジなどの若木がほしい、と要望が出た。そのほうが早く育ち、早く売れるからだ。この村の経済状況は1日1ドルにも達しない。周囲に果樹などがあるわけではなく、谷間に陸稲がわずかに見える程度である。



〈話し合いで、次の世代のために緑の大地にしたい、と発言する住民〉

これまで、彼らはどのようにして村の経済的発展を目指すべきかなど考えたこともなかったと言われていた。今、経済的な活動と自然の再生に向けた活動が、村が一体となって始まろうとしている。彼らの中に何らかの潜在的な能力を感じることができる。この能力を生かすために、必要に応じて知識と技術、活動のネットワークを提供する。彼らが自信と責任をもって、たくさんの経験が積めるように、活動が継続していくことを願ってやまない。



実現できた平成24年度の事業

1. マダガスカルの高原地帯における土砂崩れの自然災害を防ぐための植樹による整備事業
(緑の募金さまから助成金を受けました)



マダガスカル共和国のほぼ中央にある高地はほとんど樹木が見られない。丘陵地帯は伐採が続き草原地帯と化して、地滑りの跡が多く散見できる。本事業の目的は、アナラマンガ地方(Analamanga Region)のフィハオナナ村(Fihaonana commune)に絶滅に瀕した自生種などを植樹することにより土砂災害を防ぎ、草原を整備し森林を再生させる植林事業を行うことにある。

土砂崩れならびに土砂の流出を防止するために植林を行った。事業地は、森林伐採が繰り返されて草原地帯となったところ。現場は地滑り、地割れがいたるところにみられ、土砂崩れが頻繁に繰り返されたことが分かる。こうした現象を食い止めるために草原の整備並びに森林再生に向けた植樹を行った。具体的な内容としては、1) 植樹方法は、2mから3mの間隔に四角形のユニットを設定し、そこに数本ずつ混植する。・その利点：ユニット方式は平原特有の強風による根返りや幹折れを防ぐことができる。2) Cinnamon などに加え、Paulownia や Intsia など絶滅に瀕している樹木を植える。3) 自然火災の拡大防止のための防火帯を作業道として活用する。絶滅にひんする自生種を植樹することで、植樹現場の周辺の表土層を確保し、保水力を高め、土砂崩れや流出を防ぐことにより、丘陵地帯のごくごく一部だが、かつての森林の再生に向けた整備を行った。この事業が、森林再生、地球温暖化に貢献する足がかりとなればよいと考えている。



2. ベトナム ラムドン県 Loc Nam 村中南部の貧困地帯の子供のための小学校建設

この地域の少数民族 Tay, Nung, Moung, Koho, Chinese 族の子供たちの要請に基づいてベトナム社会の中で孤立しないように小学校教育の充実を図るために小学校を建設した。(ひろしま・祈りの石国際教育交流財団さまより助成を受けました)



(右: ベトナム代表理事 Quan 氏)

3. 近畿大学総合社会学部とベトナム・ダラット大学社会福祉学部の学生の協働プロジェクトの支援 <特集記事をご覧ください>

4. MDバードキャンペーン (マダガスカルを守るキャンペーン)

マダガスカルを守るために他国との連携システムを作る。そのためにマダガスカル首都にあるアンタナナリボ大学の理学部教授で鳥類の専門家であるハジヤ氏を中心に平成25年度からニュースレターを皆様に届けることになった。

ツアーに参加して

川田 明美 (正会員: 岡山県津山市在住)

初めまして。私は副理事長の中西省吾さん(岡山県苫田郡在住)を通じて、新田理事長と出会い約4年になります。海外でのボランティアの活動には大変興味がありました。



(左: 中西さん 右: 川田さん ラオスにて日本料理を提供)

私の住んでいる田舎町では、タレントがテレビで、海外ボランティア活動をしているぐらいの情報しか入ってきません。2009年7月にラオス、2010年2月にマダガスカルへ活動内容も解らないまま、旅行気分で参加させていただきました。

観光旅行では見られない風景に驚きました。私の生まれた頃の光景です。牛が草をはみ、にわとりが餌をついばむ、雨が降れば道がぬかるみ…。臭いも強烈…。人々の暮らしぶりは一見のんきなものです。

村の人たちは、その日暮らしというか何もしてない。朝からタバコを吸いながらしゃべってばかり?生活についての意識が私たちとちがうのでしょうか。今よりもっと良くなろう、いい暮らしを手に入れよう、便利にしようというという発展的な意識がないように思われました。今する事は、今すぐにするのではなく、そのうちすればいい、ということなんです。

アイユゴーの皆様は、畑の灌漑用水を作り、パイロットファームを作り、現金収入を得るために農民の意識改革をしています。そういう地道な活動を知りました。長い時間と気力が必要だと思います。

この私に何が出来るか? 自問自答しています。私は小さな居酒屋を営んでいます。ラオスやマダガスカルの写真を店に置いて、お客様に見てもらい、つたない説明をしています。世界の貧しい国の現状を知ってもらうために…。訪ねに来た人はみんな口々にこう言います。『ママはそこで何してきたの?』と、そうです私は見てきただけです。『参加してみない?』とたずねても『そんな余裕はない』です、と。

日本人の人々の意識も変わらないといけないと思います。貧しい人たちの生活を支援することの大切さを少しでも多くの人に理解してもらうことは大切な事だと思います。また、スタディーツアーに参加したいと思います。



(左から中西さん、ソムヨツツさん、川田さん、カッフアさん、新田さん)

【感謝】

(特活) アイユゴー通信をご覧いただき、誠にありがとうございます。私たちは自らの知識・技術・経験と奉仕の精神を持って、協力を必要とする人たちの自立を目指した開発援助を通じて、その地の文化を尊重理解し、草の根の友好親善と、自らの人間としての価値を高めることを目的とし活動します。皆様のご参加・ご協力を心からお待ちしております。

e-mail : snittaskmj0715@yahoo.co.jp

HP : <http://aiyugo.fc2web.com>

【振込先】

[特定非営利活動法人 アイユゴー 理事長 新田幸夫]

三井住友銀行 阿倍野支店 : 7,479,470

ゆうちょ銀行 : 00930-9-144252

発行: 新田幸夫 編集: 加藤鐘三 印刷: (株)フジカク